
「愛してる」が迷ったら

愛田雅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「愛してる」が迷ったら

【Nコード】

N0727D

【作者名】

愛田雅

【あらすじ】

ウエディングプランナーデビューを忘れられない初恋の人の結婚式をプロデュースすることになってしまった。高校時代を振り返りながら、目の前の現実を受け止めることができるのか・・・。

私と先輩

「お前、また別れたのかよ」

申し訳ないという気持ちを込めながら、私は双葉先輩に紹介された彼氏と別れたことを告げた。双葉先輩には、過去に何人もの男性を紹介されたのだが、どれも長続きすることはなかった。今回も言いつらいと思い、二人でよくいくチェーン店の居酒屋で、お酒の力を借りて話をしたのだった。

「すつごく、良い人ではあったんですけどねえ・・・」

言葉を濁らせつつ、私は双葉先輩に背を向けた。

「そんなこと言って、お前、本当は初恋の男のことが忘れられないだけなんじゃないか」

双葉先輩が、私の背中に話しかけた。

初恋の男——否定したい言葉ではあるのだが、私はその言葉を否定できない。

「おい、どうしたんだよ」

梅酒の入ったグラスを手を持ったまま、ぼーっと店の入り口の方を見ていると、双葉先輩に肩を叩かれた。

チェーン店の居酒屋は、照明が明るすぎる。もっと薄暗い照明だったらと、強く思った。自分の顔の表情がすべてわかってしまうのではないか。初恋の男という言葉に、私は敏感に反応してしまうのだ。すぐには双葉先輩の顔を見たくはなかったのだが、もう双葉先輩に背を向けるのをやめた。そして、ずっと手に持っていたグラスをカウンターに置いた。

「やっぱり、忘れられないっていうことなのか？その、初恋の男とやらを」

もごもごさせながら、双葉先輩が言った。

忘れなくてはいけない——私は、初恋の人を忘れたいと強く思っている。イチゴのように甘酸っぱくて、キラキラと輝き続ける初恋

を忘れてはならない。だけど、どうしても忘れることができない。今でも、私の心の中で輝き続けているからだ。

こんな状態では、どんな男性と一緒にいたって、その人のことを本気で好きになれるはずがない。頭では分かっているのに、双葉先輩に紹介された男性と付き合ってしまう。それは、さみしいからなのか。それとも、初恋の人を超える人が現れると信じているからなのか。きっと、どちらも違うだろう。初恋の人を無理やり忘れようとしているからだ。

ビールを飲みながら、双葉先輩が私に寄ってくる。

「いい加減にしるよ。初恋の奴とは二度と会えないんだろう？ だったら、早く忘れる」

言い終わると、また、ビールを飲んだ。機嫌が悪いのか、双葉先輩は珍しくビールのジョッキを強くテーブルに置いた。

毎回、私が双葉先輩に紹介された人と別れたことを告げてもここまで荒れることはなかった。今日は、珍しく双葉先輩が荒れている。今回紹介してくれた人は、よほどかわいがっていた人だったみたいだ。

「まったく、人が一生懸命お前のためを思っていていいやつを紹介してるって言うのに」

眠そうな声で、双葉先輩がぶつぶつ愚痴を言い始めた。

「ねえ、先輩。それよりも、いいニュースがあるんですよ」

「いいニュースだって？ 俺の紹介した人間を振っておいて、何がいいニュースだよ！」

話題を変えようと思ったのだが、かえって叱られてしまった。しかし、本当にいいニュースはあるのだ。

「まあ、話を聞いてくださいよ。実は、今度、ウェディングプランナーデビューが決まったんですよ！」

すると、双葉先輩のテーブルについていた肘が外れた。

「なんだって、ウェディングプランナーデビュー？ 自分の幸せもつかめないのか？」

双葉先輩は、いたずらっぽく言ってはくれなかった。真面目に私を叱った。嫌味なせりふではあるが、決して否定はできなかった。

「意地悪言わないでくださいよ」

私には、それくらい言葉しか浮かばなかった。

「まったく、自分の幸せもちゃんと考えろよ。じゃないと、俺が疲れちゃうじゃないか」

箸を持ち、唐揚げを食べようとしたが、双葉先輩の言葉が引っかった。なぜ、「俺が疲れちゃうじゃないか」だと言ったのだろうか。お酒で赤くなったのか、自分のセリフで赤くなったのかはわからないが、双葉先輩が赤い顔をしてビールのジョッキを見ていた。

「先輩、どうして、先輩が疲れちゃうんですか？」

「あ、ああ」

そういうと、双葉先輩は私の方に向き直った。

「お前が、俺の紹介した後輩と別れたって言うことは、また誰かを紹介しなくちゃいけないだろ？お前が、ウエディングプランナーなんてやってみろ。人の幸せを見て、より一層、シングルの淋しさを感じるだろう。その淋しさをいやす相手と言ったら、俺しかないんだからさ。俺が疲れるってわけさ」

言い訳じみた気がしたが、やさしいけれど照れ屋な双葉先輩らしい言葉のような気がした。ただし、双葉先輩は照れ屋過ぎるような気がしなくてもいい。というのも、双葉先輩には大学時代から付き合っている瞳先輩がいるのだ。私と双葉先輩と瞳先輩は大学の同じサークルで知り合った。私が1年生の時、二人は3年生で、すでに誰もがうらやむようなおしどり夫婦という言葉がよく似合うほど、仲の良い恋人同士となっていたのだった。双葉先輩も瞳先輩もとても後輩の面倒見がよく、特に私を妹のように二人ともかわいがってくれていた。だからこそ、こうして双葉先輩と二人きりで会っていても瞳先輩は、私たちのことを深く追求することはない。

双葉先輩と瞳先輩は、順調に大学を卒業した。社会人生活が落ち着いてきたころには、きつと二人は結婚するだろうと私なりに考えてい

たのだが、もう落ち着いてきたと思われるのに、いまだに二人の間に結婚の話は出ていない。

「そういう先輩たちは、いつ結婚するんですか？」

唐揚げをつまみ上げながら、双葉先輩に聞いてみた。すると、双葉先輩は肩を大きく動かして驚いた表情をした。

「どうしたんですか？」

私が聞くと、双葉先輩は胸を右手で抑えた。何か、悪いことでも言ってしまったのだろうか。

「突然、変なことを聞くなよな」

双葉先輩は、顔を真っ赤にしていた。

「だって、早く結婚してくれなくちゃ、私の最初の結婚式のプロデュースを先輩たちにできなくなるじゃないですか」

「お前は、俺たちを祝うためだけにウエディングプランナーになったわけじゃないだろ？」

「まあ、そうですけど」

「だったら、俺達のことは気にするな」

双葉先輩は、まだ結婚願望がないのだろうか。瞳先輩の気持ちかわからない今は、これ以上、双葉先輩たちのことは詮索しない方がいいだろう。

初恋が始まるとき

「この桜の木の下で、3月31日に会おう」

これは、私が言ったセリフだ。いまだに、この台詞が私の頭を支配している。

初恋の男性に言った言葉、そして、私を苦しめる言葉でもある。

この台詞の後、初恋の男性とは一度も会えなかったのだ。

私が高校3年生の時、大学受験のために、予備校に通うことになった。友達と一緒に予備校に通うことにはなったが、講義は別々になっってしまった。心細い気持を持ちながら、私はひとりで予備校に通うこととなった。

授業はとても広い教室で行われた。高校の教室の2倍くらいの広さの教室だった。

引っ込み思案な私は、後ろの方の席にちょこんと座った。最初の授業は、早めに予備校についてしまったので、他の生徒は数人いるくらいだった。

周りをきよろきよろしながら、私は机の上に鞆を置くと、テキストとルーズリーフとペンケースを出した。鞆はあいている隣の席に置いた。

数人ではあるが、教室には人がいるのに、気味が悪くなるほどしんとしていた。静けさに押しつぶされそうになりながら、テキストを広げて、今日やるであろうページを読むことにした。

友達と一緒に講義を受けたかったなと考えながら、テキストを黙って読み進めた。こうしてひとりでテキストを読んでいると、一人の方が気が散らなくていいなと思い始めた。

次第に教室はにぎやかになってくる。もちろん、騒いでいる人がいるというわけではなく人が増えただけのこと。これから1年間、同じ教室で一緒に勉強をする人たちが集まってくる。

でも、彼らは仲間であると同時にライバルでもあるんだ。こんな
に人がたくさん集まっているのに、本当は孤独なのだ。

講義が始まる5分前、私の目の前に一人の男子が座った。

今思えば、このときの印象をもっと強く残しておきたかった。目
の前に座った彼のことを最初から覚えておきたかった。

講義が始まると、最初に先生がプリントを配った。とはいえ、適
当に前の席の子にプリントの束を渡すと「適当に後ろで調節して」
と言っていた。

私の列は何と私が一番後ろであった。私のところはぴったりプリ
ントの枚数が合うといいなと思いつながら、プリントが自分の所まで
来るのを待っていた。前の子からその後ろの子へ、規則正しい動き
でプリントは後ろに回されている。

私の前の席までプリントが配られ、次が私の番。すると、前の席
でプリントが止まった。もしかしたら、この列はプリントが足り
なかったのではないか。あまつている列に行つてプリントを一枚も
らいに行こうかと思つていると、前の男子が振り向いた。そして、
私にプリントを一枚だけ渡してくれた。

プリントが足りなかったわけじゃないんだ——と、思っていると、
前の席の男子が立ち上がり、窓側の列の最後尾に行った。窓際だけ
がかなりの量のプリントが余っており、その男子は一枚プリントを
持つて自分の席に戻った。

前の男子のやさしさをその時、私は感じた。普通なら、一番後ろ
の席である私が、他の列にプリントをもらいに行くはずだったのだ
から。

それが、彼に対する第一印象だった。

その日の講義は、彼を意識しながら聞いていた。ノートを取りな
がらも、先生の話聞きながらも、彼を意識していた。

単純かもしれないけれど、それまでの私は男子に同性としてしか
扱われてもらえなかったから、対処方法がよくわからなかったのだ。
これが、恋の始まりだったのかもしれない。しかし、それはとて

も苦くて切ない味の恋だった。

瞳先輩

もう帰っては来ないとわかってはいても、私は何度となく高校時代の恋を思い出していた。こんな私は、おかしいのだろうか。未練がましいのだろうか。そして、忘れられない男が原因で、恋が長続きしないのは罪なのだろうか。

月がきれいな夜、一人ぼっちの夜。テレビもつけずに、窓際でぽっかりと浮かんだ満月を見ていた。

私の穢れた心を洗って欲しい。

心の中で、呟いた。

仕事帰りに買った烏龍茶の缶を手を持ち、窓辺に座る。月の光を感じながら、忘れられない恋を懺悔する。

ぶるるるつとりビングのテーブルに置いておいた携帯が震えた。パイプのままにしていたことを今思い出した。

烏龍茶の缶を床に置き、テーブルに置いてある携帯を手に取り、液晶画面を見ると、メールを受信したと書いてあった。すぐにメールを開くと、瞳先輩からだった。

金曜日の夜、二人で食事でもしないかって書いてあった。特別な用事も入っていないので、すぐにOKの返事を書いて出した。

返事はすぐに来た。7時にいつもの居酒屋だと書いてある。私は、了解と返事をした。

瞳先輩に、忘れられない恋を話そうかどうかどうしようか。双葉先輩には、ずいぶん前に初恋の話をしているんだ。瞳先輩にも話した方がいいだろう。

今度の金曜日、瞳先輩に話してみよう。

あつという間に訪れた金曜日。天気は曇り。慣れつつあるウェディングプランナーから、瞳先輩の大学時代の後輩へと変身する。

かすかに吹くひんやりとした風に身震いしつつも、早足で瞳先輩

との待ち合わせ場所へと急いだ。街を行く人を追い越し、時にはぶつかったりしながら、心の中にあるモヤモヤとともに私は進んだ。
「なっちゃん！」

私を呼ぶ声が、遠くから聞こえてきた。私は、その場に立ち止まり、あたりを不安げに見まわした。

数秒後、勢いよく後ろから私の両肩をつかまれた。

「先輩！」

振り返ると、瞳先輩がいた。

「久しぶりだね。元気だった？」

「ええ、瞳先輩は相変わらず元気そうですね」

「うん！私は、すつごく元気よ」

瞳先輩の元気は、双葉先輩から作られているのだろう。二人の関係は、いつも冬の私と違っていつも春なのだろう。

「ね、早くお店に行こうよ、ね」

「は、はい」

瞳先輩の元気に少々押されながら、瞳先輩に腕をつかまれ、大学時代からよく行くチェーン店の居酒屋へと向かった。

居酒屋は混んでいた。値段が安いからか、大学生が多い。大声で騒いでいる声を背に受け、窓際の席に案内された。

「ずいぶん会ってなかったでしょう？そろそろ会いたいなって思っていたのよ」

私のことをそんな風に思っていてくれる瞳先輩の愛情が、冷えた私の心にしみた。

「この間、双葉先輩にはあつたんですよ」

「聞いたわよ。また、彼氏を振ったんですって？」

「人聞きの悪い言い方しないでくださいよ」

冷や汗をかきながら、メニューを広げ、近くににいる店員に適当に私が注文した。瞳先輩は、梅酒サワーを必ず最初に飲むことを覚えていたので、それももちろん頼んだ。

あのことを相談するチャンスだ——瞳先輩から、双葉先輩から私

が今独り身だということは伝わっているのだから。

「実は、瞳先輩……」

「何？急に改まっちゃって」

背もたれにどっぴりともたれた瞳先輩が、きよとした表情で私を見ている。ほんの少しだけ、今はやめておこうという気になったが信頼できる瞳先輩に今の自分の気持ちを聞いてほしい気持ちが勝った。

「私、忘れられない人がいるんです」

「……ええっ！」

瞳先輩が突然、体を飛び上がらせた。私の言葉が呑み込めていならしく、瞳先輩は口元を忙しくぴくぴくと動かしている。

「もしかして……、それで、誰と付き合っても長続きしないって言うんじゃない？」

「そのとおり……です」

頭を抱えたと思ったら、突然頬杖を突いたり、瞳先輩は全く落ち着かなくなってしまった。

「その忘れられない人とは、連絡をとったりはしているの？」

「いいえ、もうどこにいるのかもわかりませんから」

「そう」

珍しく、瞳先輩がテーブルを指でリズムよく叩いている。口元を頬杖で隠し、店内の遠くのほうをぼんやりと見ている。

「だったら、もう完全に忘れるべきだと思うんだけどなあ」

独り言のように、瞳先輩が言った。

「はい。自分でもそう思うんですけど、それがなかなかできなくて」

「だって、もう会えないんでしょう？」

「はい」

「目の前で、なっちゃんを愛してくれる人のことだけを考えてほし
いな」

ふつうは、そうするべきなんだと思う。なのに、私はそれができずにいる。そして、こんな自分が情けなく思える。その上、人の幸

せをプロデュースしようって言うんだから、我ながら何を考えているんだろうと思う。

「そうなんですよねえ」

うつむいて、私が言つと、瞳先輩が頬杖を突くのをやめて、私をまっすぐに見た。

「思い出はね、美しいほうがいいのよ。現実には疲れた時に、美しい思い出を思い出せば、疲れだって美しい思い出にかき消されちゃうわよ」

美しい思い出——初恋の思い出は、私にとっては美しい思い出だ。ならば、美しい思い出を汚すことなく、このまま大事に取っておいて、小出しに自分を励ますように使っていけばいいのかもしれない。「そうですね。美しい思い出をこのまま取っておいて、目の前の人を全力で支えていけばいいですね」

「ええ。なっちゃんになら、きつとできるわよ」

「なんだか、肩の力が下りたような気がします」

「よかった！さ、飲もう！」

ようやく威勢よく二人だけの宴会がスタートした。

一番下の人

もうすぐ、わが社のウェディングフェアが開催される。入ったばかりの私も、会場のセッティングに追われる日々。

会社のパンフレットを手配したり、会場の飾り付けを手伝ったり。手作りウェディングのプロデュースに力を入れていることもあって、手作りブーケにチャレンジしたり、ウェルカムボードを作ったりと、まるで自分が結婚するかのような気分に浸ったりした。

ウェディングのプロデュースを考えているときは、まるで夢の世界に誘われているような気がした。天使たちが私たち人間の手を取り、夢の世界へ連れて行ってくれるような、子供っぽい発想かもしれないけれど、私の頭の中には、幸せに充ち溢れた世界が広がるのだった。

「なずなちゃん!」

私を呼ぶのは、室町先輩だ。私のトレーナーで、とにかく明るい呼び方が、ころころ変わって、呼ばれた私が、いつも驚かされる。

今日は、かなりなれなれしい感じの呼び方。ということは、何か企んでいるのかもしれない。

「室町先輩、なんですか」

「ちよつと、お願いがあるんだけど」

室町先輩の顔を見ると、あまりいいお願いではなさそうだ。

「なんです? お願いって」

「ちよつときて、ちよつと・・・」

どう考えても、いいお願いではなさそうだ。かといって、一番下の私が断ることなどできるはずもなく、黙って、先輩の後について行った。

「ごめんね。本当は、男性にやって欲しいんだけど、男手はないし、女子で一番背が高いのが、なずなちゃんだったから」

申し訳なさそうに言われてしまった。

看板が、入口の前にぽつんと置かれている。私が、看板を取り付ける役を仰せつかったということだ。

「わ、私が、やるんですか？」

「うん。他に背の高い人がいないのよ」

「背の高いって……」

室町先輩に言われて、会場を見回すと、女子の中で一番背が高いのは、確かに私みたいだ。そして、男手はこの会場には皆無だった。

「そうですか」

肩を落とす私。

「私も手伝うからさ」

優しく私の肩に手を当て、室町先輩が言った。

仕方なく、脚立に上り、室町先輩から看板を受け取って、よろよろしながらも看板を取り付けた。看板を取り付けること自体は、それほど難しい作業ではなかった。

「ありがとう！」

脚立から降りると、室町先輩が私に抱きついて、熱烈にお礼を言ってくれた。

「先輩、大げさですよ」

苦笑しながら言ったのだが、室町先輩は興奮したままだった。

悲しきウェディングフェア

手作りの雰囲気が漂うウェディングフェアの当日を迎えた。

わが社の一番の売りが、「手作り」なのだ。

彼氏のいない痛い私が、ウェディングフェアでしつかり接客を努めなくてはならないのは、言うまでもなくいろいろな意味で痛い。

腕を組むカップルや、手をつなぐカップルを見ては、心の中で何度となくため息をつく。その時の私の顔は、もちろん笑顔全開。手作りのウェディングボードを見入っているカップルにそつと近づいて、

「こちらのボードは、手作りなんですよ。実は、私が作ったんです」と言うと、二人とも私の顔を一斉に見た。

「誰でも簡単に作れますから。手先が器用な人は、凝ったものを作ったりもしますし。あまり手先が器用でない人でも、とても楽しんでかわいらしいウェディングボードを作っている人もたくさんいますから」

すると、未来の新婦と思われる女性が、ウェディングボードをじつと見つめた。どうやら、自分も素敵なウェディングボードを作りたいと思っているらしい。そんな彼女の肩を優しく抱く未来の新郎ほのぼのとした雰囲気だ。

痛い私がいらないほうがいい雰囲気になってきたので、退散した。

この会場には、幸せがあふれている。どこを見ても、バラ色の幸せに包まれている。包まれていないのは、私くらいなものなのかもしれない。

あまり、痛い、痛いとも言ってはられない。私がここにいないは、一人でも多くの人を幸せにしたいから。幸せのお手伝いをしたいからだ。幸せのおこぼれがもらえればもっといいけれど。いやらしいことを考えると、嫌なことが起こる可能性大。もっと前向きにすべてを考えなくては。

こんな時に限って、双葉先輩のきつい一言を思い出した。

「なんだって、ウエディングプランナーデビュー？自分の幸せもつかめないのか？」

ウエディングプランナーになる！って思った時は、彼氏がいたのに。デビュー後に、いなくなるとは。私から別れを切り出したんだけど。

今は一人でも、そのうち彼氏ができるはず。双葉先輩に文句を言わせないようにしなくちゃ。

フェアの会場の雰囲気にも慣れてきて、だんだんと自分が独り身だって意識しなくなってきた。

私は、幸せのプロデュースをする人間。そう自覚してきたのかもしない。

先輩たちと一緒に、会場に訪れた結婚を考えているカップルたちの対応に追われた。みんな、お互いに見つめあったり、中にはテーブルの下で手をつないでいるのではないかと思われるような人までいた。

世界中を見渡せば、戦争が起きているところがあれば、飢餓に苦しんでいるところもある。そういうところに、このフェア会場の幸せの雰囲気だけでもおすそわけできたらって思うほど、ラブラブな世界だ。

私は、人がいいのだろうか。カップルが目の前でにこにこしていると、その笑顔につられて、私までにこにこしてしまう。笑顔は伝染するということなのかもしれないけれど。

ひと組、またひと組と対応をしていると――

突然、私の眼に飛び込んできた衝撃的な光景。

とても、信じられないような光景に、私はぽかんと口を開けそうになった。

私の前に現れた、そのカップルは、手をつないで、私の前に現れ

た。

私の、初恋の人。

ずっと、私の心の片隅に居続けた人が、他の女性と、今、結婚しようとしている。

幸せそうな雰囲気醸し出している二人が、腕を組み、すでに結婚しているような雰囲気さえ感じさせながら、私の目の前にやってきた。

驚きを隠さなくては。

ひとつ、息を飲んで、二人にこやかな笑みを送った。

すると、私の初恋の人が、私のことに気がつく——その顔がこわばった。その瞬間を私は見逃さなかった。目が合う私たち。時が止まっているかのような錯覚さえ覚える。

私のことを覚えている。彼は、私のことを明らかに覚えている。

だからこそ、驚いた瞳で私を見ているのだ。

そんな事とはつゆ知らず、女性のほうはらんと輝いた瞳で私を見た。

「どうぞ、おかけください」

私が言つと、二人が座った。

まさか、初恋の人がほかの人と結婚するとは。そこまでは仕方がないとはいえ、私が、初恋の人の結婚式をプロデュースするはめになるとは。

あなたの名前

予備校でしか会わない、あなたの名前。

いつしか、私は目の前の席に必ず座る、あなたの名前を知りたいと思うようになった。

「ねえ、何て名前？」

って、気軽に聞くことなど到底無理だった。だんだんと私の中で、あなたの存在が大きくなってしまったから。

授業中ともなると、あなたの後ろ姿が気になって仕方がなかった。よく見ないとわからないような寝癖を見つけたこともあった。そんなところを見ている場合じゃないって思っているにも、ホワイトボードを見るたびに、あなたの後ろ姿を見ることになるから。

数回の授業が過ぎ、目の前のあなたが気になる存在になり始めたころ。

決まって、私のほうが先に予備校に到着していた。ノートやテキストをカバンから出して、授業の予習を始めようとしたとき、あなたが目の前の席に座った。

椅子を引く音が聞こえた時――

私は驚いて、消しゴムを落としてしまった。

かっこ悪い。恥ずかしい。

私の脳裏にそんな言葉が躍り始めながらも、消しゴムを拾おうと席を立とうとすると、あなたが先に消しゴムを拾ってしまった。

「はい」

そう言って、私の席に消しゴムをあなたは置いてくれた。ぽーっとしながらも、

「あ、ありがとう」

口をもごもごさせながら言った。

もっともっと、話がしたい。そう思っていると、

「あの、どこの高校ですか」

勇気を出して、聞いてみると、彼はこちらを向いてくれた。いろいろと話をしていると、私と彼は同じ路線に住んでいることがわかった。

「同じ路線だったのか。奇遇だね」

思いのほか、話は盛り上がった。

私たちの周りは、全く話声なんか聞こえない。ここにいるのはみんな受験生。ようは、ライバルなわけだ。ライバル同士で、こんなに和やかに話をすることは、変なのだろうか。

「そうだ、名前は？」

質問したいことは、彼のほうから聞いてきた。

「私は、日比野なずなです。あなたは？」

「俺は、吉永恭介。よろしくね」

吉永恭介。

心の中で、吉永君の名前を口ずさんだ。

「ライバルだけどね」

照れ笑いを浮かべて、私が言った。

それからは、予備校が楽しくなった。授業を聞いていても、目の前にいる吉永君を見ると、ピンと張りつめた教室で、緊張していた心がほぐれていった。

でも、本当は緊張の糸は切れないほうがいいだろう。受験生なのだから。勉強した内容をしっかりと頭の中に叩きつけなくてはならないのだから。

わかってる。

わかっているのに、もっと吉永君と近付きたい気持ちが強くなってしまう。

授業がうわの空・・・とまではいかないけれど、力いっぱいとはまではないかないうような気がした。

受験勉強が何よりも最優先・・・のはずなのに、恋が私の頭を支配している。

初めて吉永君の名前を知ったその日の授業が終わった後、私たちは自然と一緒に帰ることになった。

予備校を出ると、春から夏へと変わりかけた季節の涼しい夜風が、私たちを包んだ。少々肌寒く感じられ、私は両腕をさすった。

「ちよつと、冷えるね」

吉永君は、優しい声で私を気遣ってくれた。

「夜は、ちよつと寒いね」

予備校から駅までは、一緒に居られる。それだけのことなのに、私はドキドキと喜びで心の中がいっぱいになっていた。

「どこの大学を受験するかは決まってるの？」

当たり前のことだけど、受験生らしい質問だ。

「行きたいところはね。だけど、受かるかなあ」

「今から弱気でどうする。これから、何か月もかけてその大学に行けるように準備しなくちゃね」

前向きな答え。その答えに、男らしさを感じた。

「そうだよな。来年の受験日まで、準備しなくちゃね」

苦笑しつつ、私は言った。

駅に着くと、お互いに回数券を取り出した。

ホームにつき、私たちは電車を待った。電車が来れば、ほんの数分で吉永君とお別れだ。また、来週になれば会えるけれど、それまでは全く会うことなんてできないのだ。

吉永君も私も電車が来る来ないということをそっちのけで、話をした。

電車が来れば、私のほうが先に降りてしまう。

なるべく電車が遅く来て欲しいと願っていた電車が、とうとう着てしまった。もう少し、ホームで話し込みたい気持ちだったけれど、人ごみに紛れこむように私たちは電車に乗った。

その時の吉永君は、ちよつとさみしそうな表情をしていたと思う。「混んでるね」

そんな会話をしつつ、私も吉永君も吊革につかまった。

電車が揺れるたびに、私の体も揺れ動いたけれど、吉永君はあまり体が動いていなかった。吉永君のほうへ倒れそうになると、

「大丈夫？」

と心配された。その優しさが、私にとっては心の中に花が咲いたような心地よさがあった。

心地いい時間は、すぐに去って行ってしまった。

最寄駅に着くと、

「私、もう降りなくちゃ」

「気をつけてね。じゃ、また来週」

吉永君は、私が電車から降りても手を振っていてくれた。私は、後ろ髪をひかれる思いで、駅を後にした。

もうすぐ夏休み

吉永君に、「日比野さん」って呼ばれると、ちょっとくすぐったい。

でも、そのくすぐったさが、心地いい。もっともっと、たくさん私の名前を呼んでほしい。

だけど、もうすぐ夏休みが来てしまう。夏期講習は、一緒に講習を受けたいけれど、吉永君は、何を取るつもりなのだろう。

先に予備校に到着した私は、予習ではなく、夏期講習のパンフレットを見ていた。どれを取ろうか決めるために。

私が到着して数分後、吉永君が教室に入ってきた。

「おっす」

照れくさそうに吉永君が言った。そんな風に言わなくてもいいのにね。

「ねえ、夏期講習、もう決めた？」

すると、吉永君は私の持っているパンフレットを覗き込んだ。

「いや、まだ決めてないよ。日比野さんは、決めた？」

きた。「日比野さん」って、呼んでくれた。些細なことなのに、心の中はお祭り騒ぎだ。

「実は、私もまだなんだ。どれにする？」

一生懸命、浮かれた声を出さないように気を付けた。

できることなら、吉永君と一緒に講習を受けたいけれど、受けられるかな？

「そうだなあ。これにしようかなって思ってたんだけどさ」

私は吉永君にも見えるように、パンフレットを広げた。すると、吉永君はパンフレットを指さして答えてくれた。

「これか。これって、この講義と同じ先生だしね。私もそれにしようかな」

「いいんじゃない」

何となく、いい流れになってきた。この調子でいけば、吉永君と夏休みも会えることになる。

この日は、授業が終わっても、私たちはそのまま教室に残り、一緒に夏期講習に受講する講習を決めることにした。

誰もいない教室。教室の中には、私たちがしかない。

空っぽの教室の中で、私たちの声がこだまする。

「いくつくらい取ろうかな」

「とりあえず、気になる講習をピックアップしてみようよ」

私の持っているパンフレットに、気になる講習にチェックしていくことにした。お互いに、気にしていた講習はほぼ一緒だった。

これなら、夏休みが来ても、吉永君と何度も会える。

「同じのばっかだな」

照れ笑いを浮かべながら、吉永君が言った。

「いいじゃん。一緒に受けようよ」

ドキドキしながら、私が言った。

「そうだな。申し込みは、来週だっただろ？」

「うん、そうだよ」

夏期講習の申し込みの初日は、来週の土曜日。もちろん、初日に申し込むつもりだ。

「一緒に行こうよ」

なんと、吉永君のほうから誘ってくれた。私の心の中は、バラ色になった。

「うん。忘れないでよね」

「忘れないって」

夏期講習申込み初日。駅で吉永君と待ち合わせをした。駅で待ち合わせなんて、初めてだ。なんだか、デートに行くみたい。

かといって、特別かわいい洋服なんて着てこなかった。いつもと変わらない、ラフな格好できた。

待ち合わせ場所の駅の入り口には、他にも待ち合わせの人でいっ

ばいだった。土曜日だから、これからどこかへ出かける人たちなのだろう。私とは、違うところに行く人たちだろう。

「ごめん、待った？」

数分待つと、吉永君が、あわてて駆け足で来た。だけど、息は切れていない。

「ううん。さっき来たところだから。申込用紙は、ちゃんと持ってきた？」

私が聞くと、吉永君はいつも持っている肩掛けカバンから申込用紙を取り出すと、私に見せるように持った。

「ほら、ちゃんと持ってきたよ」

手をつないだりすることなく、私たちは微妙な距離を保ちながら、予備校へ行った。

夏期講習の受付カウンターの前には長蛇の列が既にできていた。

「みんな、早いね」

驚いて、私が言った。

「ほんとだな。さ、並ぼう」

私たちは、一緒に列に並んだ。吉永君が前だ。

受け付けは、すでに開始しているけれど、なかなか前に進まない。このまま、前に進まなくてもいいって、私は思っていた。少しでも長く、吉永君と一緒にいたい。

「進むの、遅くない？」

列の前のほうを見ながら、吉永君が言った。

「そうだね。念入りにチェックでもしてるんじゃない」

そう言いながら、内心、吉永君はあんまり私と一緒にいたくないのかなって、不安になった。

十分、いや、もっと待っていたんじゃないだろうか。吉永君の番が来た。吉永君は、受付が済むと、

「後ろで待ってるから」

と言って、行ってしまった。

私が申し込みを済ませ、急いで吉永君を探した。吉永君は、階段

の前にちよこんと立っていた。私を見るなり、口元をゆるめて、私を迎えてくれた。

何も言わず、私たちは予備校を出た。

結局、吉永君と全く同じ講習を受けることに決まった。夏休みは、いつもよりも吉永君と遺書にいられそうだ。

夏の夜

夏期講習が終わった後は、いつも吉永君と一緒に自習室で勉強をしていた。

帰る時間は、いつも夕方だった。

「今日は、花火大会があるんだよねえ」

夏期講習帰りの夕方、駅には浴衣を着た女性がたくさんいた。そういうえば、今日は大きな花火大会があると、高校の友達から聞いていた。

彼女は、推薦ですでに大学進学は決まったようなものなので、今日は花火大会へ行くらしい。

うらやましい。そう思った私は、駅に着くなり、吉永君に恨めしい目で言ってしまった。

「今日は、有名な花火大会があるらしいね」

吉永君は、そっけない口調で言った。

まるで、受験生に花火なんて必要ではないと言っているようにも聞こえた。

私が、おかしいのだろうか。受験生の自覚がなさすぎるのかも知れない。

それ以上、花火大会のことを言うのはやめることにし、私たちはまっすぐ帰ることになった。電車で揺られて、だんだんと降りる駅が近づいてくる。

「今日は、一緒に降りるよ」

ずっと黙っていたと思ったら、突然、吉永君が妙なことを言い出した。

「え？　なんで？」

「ちよつとね」

それしか答えず、吉永君は含み笑いを見せた。

そして、吉永君は本当に私と一緒に駅の駅で降りた。いったい、どう

したというのだろう。いままで、同じ駅で降りたことなんてなかったのに。不思議に思っていると、吉永君は駅前のコンビニに迷わず入って行った。

一目散に行ったのは、花火売り場だった。入り口わきに花火の特設コーナーがあったのだ。吉永君は、大きなセットを手にとって、「花火、一緒にやろうよ」

と、照れながら言った。

「え、あ、うん。いいよ」

想像すらしていなかった展開に、それだけ言うのがやっとだった。吉永君が花火を買っている間に、私は大急ぎで家に帰ると、バケツを持って吉永君のいるコンビニに戻った。そして、一緒に近所の公園へと向かった。

空は、まだ明るかった。夕焼け空になりかけの赤い空だ。

「まだ、早いんじゃない？」

「そうだね。じゃあ、先に食事にしよう」

そう言って、吉永君は公園のすぐ近くにあるコンビニに一人で行ってしまった。私は、花火の番人をするに。

吉永君が戻ってくるまでの時間は、苦しいほど長く感じられた。もしかしたら、もう戻ってこないのではないかと思うくらいだった。しかし、吉永君はビニール袋を持って戻ってきた。

「お待たせ。おにぎり買ってきたよ。あと、お茶もあるから」

吉永君の額に書いた汗を見て、きつと、私を待たせないように走って行ってきたのだろうと思った。

「ありがとう」

と、私が言うと、吉永君は照れくさそうに笑った。

軽めの夕食を済ませて、まだ、空は暗くはならなかった。

「まだ、明るいね」

「夏の夜は短いからね。でも、もうそろそろ始めようか」

そういうと、吉永君は花火をビニール袋から取り出した。

「ちよっと待ってて。バケツに水汲んでくるから」

「え、あ……」

返事をする間もなく、吉永君はバケツを持つと、走って公園の中央にある水道で水を汲んだ。公園を見渡すと、私たち以外に誰もいなかった。二人だけの公園。

水の入ったバケツをこぼさないように慎重に運ぶと、私たちのいるベンチの前にバケツを置いた。

「どれがいい？ 好きな選んで」

吉永君に言われ、一本、花火をビニール袋から取り出した。

その間に、吉永君はろうそくに火をつけていた。

「よし、始めよう」

風がほとんど吹いていない今のうちに、花火に火をつけよう。

私は、ベンチから立ち上がり、ろうそくの炎に花火の先端を付けた。ほんの数秒で、火は花火に移った。

パチパチツと音をさせながら、花火が火を噴いた。

「吉永君も！」

私が催促すると、吉永君も私と同じ花火を手を持ち、私の隣に立った。かすかに、吉永君の腕が、私の腕に触れたような気がして、ドキツとした。びっくりしていると、吉永君は私の花火の炎に自分の花火を近づけていた。吉永君の花火に火が移ると、今度は私の持っている花火が終わってしまった。

「終わっちゃった」

残念そうにつぶやいて、バケツの中に燃え終わった花火を入れた。「どんだんやろうよ。まだ、花火はたくさんあるんだからさ」

「うん、そうだね」

と言いながら、私は次の花火を取り出した。

「早く、早く」

ビニール袋から花火を取り出すと、吉永君が手招きをしていた。

「もう、終わっちゃうから、早く」

どうやら、吉永君の花火の火を使って火をつけるように言っているらしい。少しドキドキしながら、吉永君の隣に立つと、吉永君の

ほうから私の持っている花火に火をつけてくれた。だけど、今回は吉永君に触れることはなかった。

気がつくと、空は暗くなっていた。花火もはつきりと見えるようになってきた。

「ねえ、今、花火の音がしなかった？」

遠くのほうから、かすかに花火大会の音が聞こえた気がして、吉永君に聞いてみた。

「え、本当？」

「ほら、耳を澄ませてみて」

二人で、耳を澄ませて聞いてみると、小さな音ではあるが、花火大会らしき打ち上げ花火の音が聞こえた。

教えてあげる

「本当だ。花火の音が聞こえるね」

生き生きとした顔で、吉永君が言った。

「でしょう？　花火大会、行きたかったなあ」

すねて、砂をスニーカーのつま先でいじっていると、

「僕たちの花火大会を再開しよう」

そういうと、吉永君は花火の入ったビニールを手を持ち、私に差し出した。その中から一本取り出すと、ろうそくの火を使って花火に火を付けた。

一本の花火が火を噴き出すと、とたんに公園は明るさを取り戻した。ジャングルジムやブランコがスポットライトを当てられたように、光って見える。

吉永君も花火に火を付けた。すると、公園に誰もいないのを確認すると、公園の中央まで走って行き、花火で何かを空中に書き始めた。

「いったい、なんて書いたのだろう。」

「今、何を書いたの？」

私が尋ねると、

「当ててみて」

もう一度、吉永君が空中に花火で文字を書き始めた。花火から出る煙がぼんやりと文字を形作っていた。

「ご・う・か・く。合格だ！」

「そう。僕たち二人とも、行きたい大学に行けるようになってね」

正直、今だけは、大学受験のことは考えなくなかった。しかし、吉永君は花火大会でも、受験のことを忘れてはいなかったようだ。

文字が書き終わったところで、吉永君の花火が終わってしまった。気がつくと、もう花火は数本しか残っていなかった。

「もうすぐ、終わっちゃうね」

「足りなかったら、もう少し買ってこようか？」

さみしそうに私が言ったからか、吉永君は優しく言ってくれた。

「うっん。大丈夫」

と口では言いながら、本当はもう少し吉永君と一緒に花火大会をやりたいたいと思っていた。

最後の線香花火は、ろうそくの前でしゃがんだまま二人並んで火をつけた。

「どっちが、先に落ちるか」

と、吉永君は言っと、顔をゆがめた。

「受験生の禁句を言ったな」

「あ、ごめん……」

本気で落ち込んでいる吉永君の顔をまっすぐに見つめた。受験のことが不安で仕方がないのかもしれない。私だって、不安だ。だけど、今は吉永君と一緒にいられる時間がうれしい。

線香花火対決は、私の負けだった。私の線香花火のほうが、先に終わってしまった。

「私の負けだね」

「そうだね」

ビニール袋には、まだ線香花火が残っている。すぐに一本取り出して、火を付けた。

「やっぱり、しめはこれだよ」

自分の線香花火を見つめながら、つぶやいた。

「ああ……ああ！ 終わっちゃった」

ついに、吉永君の線香花火も終わってしまった。吉永君もすぐに、新しい線香花火を取り出した。

公園の中にパチパチと線香花火の音が響いた。遠くから聞こえる花火大会の音と混ざり合って、少々騒がしいような気がした。

「ねえ、吉永君。手話って知ってる？」

突然、話題が変わって吉永君は驚いた顔をした。

「え、手話って、耳の聞こえない人がやる、あれ？」

「そう。吉永君は知ってる？」

「いや、知らないな」

花火越しに、吉永君が私を見ている。

「私、ちよつとだけ知ってるんだ。前に、本屋で手話の本を立ち読みしたことがあるから」

「へえ、そうなんだ」

だんだんと吉永君の表情が明るくなってきた。

「教えてあげよつか。簡単な手話ならちよつとだけ覚えてるから」

「うん。先生、教えてください」

軽く吉永君は頭を下げた。

私の線香花火が、ちょうどいいタイミングで終わってしまった。

「じゃあね。好きと嫌いつて手話を教えるね」

吉永君の線香花火も終わってしまった。ろうそくの火だけとなった。

「まずは、好きからね」

と言いながら、私は右手の親指と人差し指を喉元に持って行き、親指と人差し指を開いていた二本の指を閉じた。

「これが、好き」

「ふうん」と言いながら、吉永君が真似してやっていた。

「次は、嫌いつて手話」

好きとは逆に閉じていた二本の指を喉に向かって開いた。

「これが、嫌いつて手話」

私が言つと、吉永君はこれも真似していた。一見、やる気のなさそうな表情を吉永君は見せているけれど、ちゃんと真似してくれていた。

「使うことは、ないかもしれないけどさ」

残っている線香花火を手に取り、私は一人で線香花火を楽しみ始めた。吉永君は、好きと嫌いの手話を交互にやっている。

私が言いたかったことを吉永君は受け取ってくれただろうか。その表情を見る限り、私が吉永君に好意を持っていることに気づいて

はいないようだ。

笑顔の女

その女性は、とにかくとびきりの笑顔を振りまいている。

なのに、隣に座った吉永君は全く笑おうとはしない。彼女が吉永君に笑顔で話しかけても、冷や汗をかくだけだ。

きっと、私がいるからだ。

目の前に、私がいるから、吉永君は笑えないんだ。

たまに、吉永君は私に視線を送る。チラッチラとだけ。私の様子をうかがうかのよう。

私は、ずっと笑顔で対応をしている。プロとして、それは当たり前のことだ。

「どのような結婚式をお考えですか？」

とびっきりの笑顔で、その彼女に話し掛ける。

「うーんと、盛大ではなくていいんですけどね。手作りで、とっても暖かい感じの結婚式がいいなって思っているんですよ。ね！」

彼女は、最後に吉永君に同意を求めるように言った。突然、そんな事を言われて、吉永君は体を飛び上がらせるくらいに驚いていた。「え、あ、ああ。そうだね」

明らかに動揺しており、またも私のほうをちらつと見た。

こういうときって、男性のほうが挙動不審になってしまふものなのだろう。吉永君は、さっきからじつとしていない。貧乏ゆすりをしたり、額の汗をハンカチでぬぐったり。目線はずっと泳ぎっぱなしだ。

私は、吉永君のフィアンセである女性と結婚式について簡単な話をした。吉永君は、ほとんどその輪の中に入っていない。

初恋の人、ずっと会いたかった人が目の前にいる。

だけど、その人は、他の女性と結婚してしまうのだ。私が、あの時、何もなかったから。こんな時に、強い後悔をしている。仕事
中なのに。

心のどこかで、ずっと待っていた人が、目の前で逃げてしまう。
心が痛い。なのに、顔は笑っていなくてはならない。今夜は、布
団の中で泣くかもしれないな。

「恭ちゃん、ちよつと、話聞いてる？」

彼女は、吉永君のことを「恭ちゃん」って呼んでいるんだ。私は、
吉永君としか呼べなかったのに。

そわそわしつぱなしの吉永君に、彼女は痺れを切らして、腕をつ
ついて結婚式の話に参加するように促している。

結婚式は、二人で作るもの。私たちはお手伝いをするだけ。なの
に、吉永君が参加しないのだから、彼女が怒るのも無理はない。

彼女が顔を動かすたびに揺れるオープンハートのピアスは、きつ
と吉永君がプレゼントしたものに違いない。胸元に揺れるダイヤの
ネックレスも、青く輝く左手の薬指の指輪も、身につけているもの
は、すべて吉永君がプレゼントしたものではないかと推測した。

私は、何ももらえなかった。いや、もらったものはある。きれい
な思い出を。

二人きりの花火大会は、今でも鮮明に覚えている。あの時は、本
当に楽しかった。もう二度と、あなたと二人きりで花火なんてでき
ないんだ。

これからは、隣の彼女と二人で人生を切り開いていくのだから。
たまに、彼女は吉永君の手を握る。堂々と吉永君の肩を叩く。そ
して、よく笑う。幸せの絶頂にいることは、その表情で手に取るよ
うに分かる。

大切なお客様に対して、嫉妬をしている。こんな自分が情けなく
て仕方がない。もっと冷静にならなければ。

そう思っていると、吉永君はちらつと私のほうを見る。

覚えているんだね。私のことを。

吉永君は、私に会いたかったの？

と、聞けるものなら聞きたい。声に出して、吉永君にプライベ
ートな話ができたら。

だんだんと妄想が強くなってきた。いったい、何を考えているんだろうと、自分を戒めて、式場のパンフレットなどを彼女に差し出した。

「うわー！素敵。こんなところで、式を挙げたいなあ」

彼女は、吉永君に猫なで声で話し掛ける。

私もそうしかかったと、思ってしまった。さつきから、ずっと彼女をねたんばかりいる。

ほとんど彼女とだけ話をし、パンフレットを渡して、二人は帰って行った。強く手をつないで。

まちぶせ

「お疲れ様です」

ウエディングフェアは、無事終了した。

会場の後片付けを終えると、私は先輩たちよりも早く会場を後にした。と言うのも、今日はがんばったから、早く帰っていいよと言ってもらえたからだ。

会場を出て、まっすぐ駅に向かおうとしていると、あの顔が私の前に現れた。

懐かしい、あの顔が……。

「よ」

はにかみながら、軽く手をあげて私に話しかけてきたのは、まぎれもなく吉永君だった。

「どうしたのよ。彼女は？」

心臓が止まりそうなほど驚いた私ではあったが、隣にいるべきはずの人がいないことには、すぐに気がついた。

「ああ、彼女を送った後なんだ。ちよつと、話でもしないか？」

ウエディングフェアのときには、無口だった吉永君が、饒舌に話している。吉永君のまったく違った顔に、戸惑いながらも、私は断らずに吉永君と食事をすることにした。

「お昼も軽めにしか食べられなかったから、めちゃくちゃおなかすいてるんだ」

もうすぐ結婚しようとしている人、吉永君の隣で、よく落ち着いた口調でしゃべれるなど、我ながら思った。

無邪気な口調に、吉永君はまた、はにかんだ笑顔を見せた。

「日比野さんといると、あの時が、目の前でよみがえっているようだよ」

あの時。

私の中でも、あの時がよみがえっていた。高校3年生の時に感じ

た、あのときめきが。

吉永君は、そんなつもりで言っているわけではないだろう。でも、私の鼓動は、完全に高校3年生のあの時と、全く同じだ。

本当は、

「どうして、まちぶせなんかするのよ」

って、どなり散らしたい気分なのに、すんなり吉永君を受け入れてしまった。

お客様だから？

いいや、違う。でも、自分には「お客様だから」と言い聞かせなくてはならないだろう。そうしなければ、私は駈け出してしまいうだ。

「学生時代の友達と会つと、学生時代の気分に戻るからね」

それは、自分に言い聞かせたせりふだった。

「ああ、そうだね」

返事をした吉永君は、どことなくさみしそうな表情を見せた。

まさか、吉永君も同じことを考えているのだろうか。高校3年生の時と、同じ気持ちで私とあっているのでは。

イケナイ想像をしてしまいそうだ。

彼は、お客様。私は、吉永君の結婚式をプロデュースするだけ。今一度、自分に強く言い聞かせた。

「この近くに、いい店があるんだよ。そこで、食事しよう」

やはり、吉永君はどことなくさみしそうな表情をしたままだ。

もうすぐ最愛の人と結婚する人が、こんな表情をするだろうか。

「うん、そうしよう」

考えてみれば、吉永君と食事をするのは、これが初めてだ。でも、もうすぐ奥さんとなる彼女とは、数え切れないほど食事に行っているのだろう。

私の知らない吉永君をその彼女は知っている。だって、私とは比べ物にならないほど、吉永君と一緒にいたはずだから。

幸せではないと感じているときに、幸せな人と一緒にいるのは、

苦痛だ。

無意味に、自分とその人とを比較してしまう。

馬鹿な事をしなくてもいいのに、自然と頭が幸福度を比較してしまふのだ。比較したって、何にもならないのに。

子供じみた考え方をしてしまう自分を、嘲笑った。

「どうしたの？」

はっとした。嘲笑う自分を吉永君に気づかれたようだ。

「いやあ、こうして食事するのって初めてだから。変な気がしちゃってね」

とっさに出たウソ。でも、吉永君は真実と受け取ったようで、それ以上、何も聞いては来なかった。

淡い光の下

穏やかな空気の流れる場所に、連れて行かれた。吉永君のお勧めのお店は、淡い光に包まれており、うるさくないところだった。

店員に案内されて席に着くと、自然と私の口から、

「へえ、いいお店だねえ。彼女とは、よくここにきているの？」
と、言っていた。

自分でも不思議なくらい肩の力が抜けた状態で、吉永君の彼女のことを口にしていたのだ。高校生の時に、あんなに恋い焦がれていた人の彼女のことを平気で聞ける。そんな自分が少し恐ろしく思えた。

「え、ま、まあね」

露骨に動揺して、吉永君は何度も座りなおした。私とは、ちつとも目を合わせようとしない。

あまり、聞いてほしくはなかった質問だったのだろう。それに、私がそんな質問をするとは夢にも思っていなかったに違いない。

「お勧めは、何？」

気を取り直して、メニューを取り出すと、吉永君に向けて開いた。まだ、落ち着きを取り戻していない様子だけれども、吉永君は顔を引きつらせながらもメニューにしっかりと目を落としていた。

「ねえ、吉永君」

少し強い口調で吉永君を呼ぶと、今起きたかのような驚いた表情を私に向けた。

「え、何」

「まったく、人の話聞いてなかったの？このお店のお勧め料理は何かって聞いたじゃない」

「あ、ああ。えっと……」

妙に、吉永君は動揺している。向かいで見ている私に、手にとるようにわかるその態度。吉永君は、いったい、どうしたというのだ

ろう。ウェディングフェアの時と言い、今と言い、これから結婚する幸せな人には、到底見えない。

結局、注文を取りに来た店員のお勧め料理をいただくことになった。

和食のお店で、テーブルとイスは黒を基調としており重厚感がある。そして、ぼんやりと光を放つ、淡いロウソクのような光に包まれている。

ぼんやりと映る吉永君は、どこもなくそわそわしているように見える。

「ねえ、吉永君。これから結婚する人なんでしょう。その割には、全然笑顔じゃないわね。男性版のマリッジブルーにでもなった？」

茶化すように意地悪く言っても、吉永君はにこりとも微笑まず、じつと私を見つめた。

「本当に、そうなの？」

心配になり尋ねてみると、

「いや、それは違うよ。ただ、こうして久しぶりに会えたことが、もしかしたら、運命なのかもしれないなって思ってたね」

器用に背もたれに肘をつき、体をのけぞらせて吉永君は、もう片方の手でテーブルを軽く楽器のように叩いた。

この再会が、運命だとしたら、それはいつたい、どんな運命だというのだろうか。まさか、本当の結婚相手が、私だと思っているのか？ まさか、それはいくらなんでも考えすぎだろう。

しかし、意味深なその言葉は、私の喉にしっかりとひっかかった。「運命なんて、大袈裟だなあ」

「そうだな。でも、会えてうれしいよ。聞きたいこともあるし」水を一口飲もうとしたときだった。

私に聞きたい事とは、いつたい、なんだろう。

「何？ 聞きたいことって」

聞き返してから、水を飲んだ。氷が入っていて、とても冷たい。のどを通るときにひんやりと体にしみわたっていくのを感じた。

吉永君は、座りなおして、テーブルの上で手を組み、唇を軽くかみしめた。

何か、聞きづらいことでも聞こうとしているのだろうか。私の心臓が、急に強く早く動き始めた。

吉永君の唇がかすかに動き始めた時に、

「お待たせしました」

店員が、飲み物を持ってきた。

吉永君は、ビール。私は、梅酒だ。

「まずは、乾杯でもしようか」

なぜだろう。私は、吉永君の話題をさえぎるように、出てきたばかりのグラスを手にもった。

「そつだな」

にこりと笑うと、吉永君もジョッキを手にもった。

「さて、何に乾杯しようか」

吉永君が尋ねてきた。

「そつだなあ。やっぱり、久しぶりの偶然の再会にじゃない？」

「よし、決まりだ。久々の再会に、乾杯！」

堂々とした口調で吉永君が言うと、私たちはグラスを合わせた。カチンとかたい音が小さくした。

そして、お互いに一口飲むと、話題は、元に戻った。

「で、さっきの話の続きだけど」

やけに冷静な口調で吉永君は言った。その冷静さが、不気味に感じる。

「何？ 話して」

梅酒のグラスを持つような、持たないようなしぐさをしながら、落ち着かないでいた。

「覚えているかな。高校生の時にした約束を」

「約束？」

「あ、忘れているな。冷たいなあ」

吉永君と過ごした、甘酸っぱい記憶なら、すべて覚えているつも

りだった。その中で、約束と言ったら、予備校で最後に会った日のことしか思い浮かばない。

まさか、吉永君は、今でもあの日のことを忘れずにいるということなのだろうか。

「ごめん。で、約束って何？」

とぼけて聞き返した。いじわるかもしれないが、ここはひとつ慎重に行きたかったのだ。

「大学に合格したら、予備校近くの公園にある大きな桜の木の下で会おうって、そう言ったじゃないか」

言い終わると、吉永君は、またも唇をかみしめた。

やはり、あの約束だったのだ。

「それかぁ。それだったら、ちゃんと約束を守ったわよ」

「守ったって？」

「私、どこの大学にも受からなかったから」

「・・・・・・・・」

一瞬の沈黙が走る。そして、

「そうか。だけど、それだったら約束なんて破っちゃえばよかったんだよ」

「え？」

「大学に受からなかったって、会いに来てくれればよかったのに」

「・・・・・・・・」

吉永君の力強い言葉に、言葉を失った。

「俺、ずっと待ってたんだぞ。何時間も。連絡先がわからなかったから。ただただ、桜の木の下で待つしかなくて。ここで待つしか、日比野さんに会う手段がないから。ずっと、ずっと待ってたんだぞ」
そういう吉永君の瞳は、赤くなっていた。

「ごめん。言いだしっぺだから、なんだか、行きづらくてね。浪人するなんて、とてもじゃないけど、言えなかったんだ」

お互いにつつまいていた。きまづくて、私は梅酒を一口飲んだ。
何の味も感じなかった。

宴のあと

私が、私から、吉永君に言った約束。

吉永君は、今でも覚えてくれているのだ。

素直に喜びたかったけれど、もうすぐ結婚してしまう吉永君から言われても、複雑に気持は絡み合うだけだった。

——もしも、吉永君がフリーだったら？

妙な妄想をしてしまいそうになる。

吉永君と分かれ、一人、寂しく三日月の下を歩いている。歩いても、歩いても、夜空に輝く三日月は私を追いかけてくる。小さなころから、ずっと気にしていることだ。

私が立ち止まると、月も立ち止まる。また、私が歩き出すと、月もまた追いかけてくる。

突然、ため息が漏れた。

吉永君に対する思いを吐き出したかのように。
月を見て、心の押し入れにしまえそうになった気持ちだが、結局あふれ出してしまえなかったのだ。そう簡単に、コントロールできない気持ち。

吉永君も吉永君だ。私に意味深な顔をして。本当は、幸せの絶頂にいるくせに。

お酒を飲みつつ、あの約束の言葉を思い出させるんだから。

——私が、一番後悔していることを——

もう忘れてしまいたい約束。

私が、全部悪いんだ。って、言いたくなるような出来事だった。あれは、高校三年の弱気な自分がした失敗談。もしかしたら、人生最大の失敗だったのかもしれない。

吉永君が、あんなセリフを言うから、今、死ぬほど後悔しているじゃない。

「約束なんて破ればよかったじゃないか」

本当に、約束を破って、吉永君に会いに行っていたら、今頃私たちはどうなっていたのだろう。

双葉先輩に男の人を紹介され続けたりはしなかったに違いない。と言うことは、双葉先輩に迷惑をかけることはなかっただろう。

考え事をしていたら、目の前に電柱があった。

前をよく見なかったからだろう。寸前で気がついてよかった。それに、何となく目が覚めた気がする。

吉永君の意味深な顔なんて忘れちゃえばいいんだ。

そう強く自分に言い聞かせる。

そうでもしなければ、私はどうにかなってしまいそうだ。

数メートル先にコンビニが見えてきた。暗闇に金銀財宝の山でも発見したかのようなまばゆい光を放っている。

少し寄って行こうか。

自動ドアを抜けると、

「いらつしゃいませ」

と言つやる気のない声が聞こえてきた。いつものことだから、あまり気にせず、おでんの前を通り過ぎると、清涼飲料水の棚の前に立った。

何か買つていこうか。

どれを買おうか迷っていると、隣のお酒の棚が視界に入った。

さつきまで、吉永君と一緒にお酒を飲んだばかりだというのに、また家で飲む気かと思つた。

しかし、今夜のことを忘れるために、お酒を買おうかとも思う。いまさら、酒の量を増やしたところで、吉永君のセリフを忘れたりほしないだろうと思い、アルコール濃度を下げるために、ミネラルウォーターを手にした。

手際よく会計を済まし、暗闇に戻つた。

静かな夜道、かたいアスファルトに私のヒールの音が響いた。

桜の約束

——大学に合格したら、この木の下でまた会おうよ。

それは、高校3年生の私が言ったセリフ。

予備校の最後の授業が終わった後に、吉永君に言ったのだ。受験仲間という中途半端な関係から、もっと肩の力を抜いた、より近い関係になりたいと思っていたのだ。

片思いを終わらせたい——

そんな思いも巡っていた。

最後の授業は、いつも以上に終わってほしくない気持ちでいっぱいだった。この授業が終われば、今まで通り、毎週必ず吉永君と会える状態が終わってしまう。

毎回、吉永君の背中を見ながら、心のどこかでほっとしながら授業を聞いていた。それも終わってしまうのだ。

そして、授業を聞きながらも私は、ある事を考えていた。

授業が終わったら、吉永君にもう一度会う約束をする。

これをやっておかないと、二度と吉永君とは会えなくなってしまうかもしれないからだ。最近、そのことばかりを考えていた。どうやって、約束を切り出そうか。それに、吉永君が守ってくれそうな約束でないといけない。

受験勉強の合間に思いついたのが、予備校の近くにある公園にある桜の木の下で会うことだ。花見がてらに、一緒に合格祝いでもしようと言えば、きっと吉永君だって約束を受け入れてくれるだろうと考えたのだ。

最後の授業だというのに、私はどうやって切り出そうか。そのことばかりを考えていた。勉強より、受験より、恋を最優先していたということだろう。

授業が終わると、私はいつもよりも遅いスピードで片づけた。しかし、吉永君はいつもと変わらないスピードで片づけていた。

「どうした。元気なさそうじゃない」

手際よくテキストや筆記用具を鞆にしまうと、吉永君はこちらを向いて、ゆっくりと片づけている私にまん丸い目を向けた。

「そんなことないよ。吉永君が早いだけ」

とは言ったものの、周りを見ると、やはり皆、手際よく鞆にテキストや筆記用具をしまい、どんどん教室から人が減っていった。

中には、まだ黒板の文字をつつしている人もいたが、大半は教室を出て行ってしまった。

私もスピードを上げるか。

仕方なく、けだるそうに鞆にテキストなどを詰め込むと、

「じゃ、行くか」

気合いの入った声で、吉永君が言った。

まるで、一秒でも早くここから去りたいと言っているかのように聞こえた。私と一緒にいたくないの？ 心の中でつぶやいたが、吉永君には全く気づいている様子はなかった。

予備校を出ると、吉永君はそのまま駅へ向かおうとした。このままでは、約束ができなくなってしまう。あわてて、吉永君の鞆のひもを引っ張ると、驚いて吉永君がこちらを振り向いた。

「どうしたんだよ」

「あのさ、ちょっと寄り道していかない？」

「寄り道？」

「そう、今日で最後なんだし。近くの公園に行つて………みない？」

心臓が止まりそうだった。受験を間近に控えていて、吉永君が断つてしまうのではないかと思っていた。吉永君も驚いた顔をして私をじつと見つめている。こんな時期に何を言っているんだと思つているに違いない。

「いいよ」

「へっ」

以外にも吉永君は固まったかと思うと、あっさりとOKしてくれたのだ。

「行こう」

吉永君に導かれるように塾近くの公園に向かった。もしかしたら、これで最後になるかもしれない吉永君の隣。悲しみに胸が押しつぶされそうになっていた。

公園までの道は、人氣がほとんどなかった。

公園内には誰もおらず、吉永君と二人きりになった。

ひんやりとした夜の公園。葉のない木々の薄暗い影の中に街灯が灯されていた。

「今日で終わっちゃったね、塾。冬期講習は違う予備校で受講するんだよね」

「ああ。直前合宿に行くから」

今、吉永君はどんな気持ちでいるのだろう。あっさりとした言葉しか言わない。私と会えなくなっても痛くもかゆくもないのだろうか。今は、それよりも受験の方が大事なんだろうな。

「受験、うまくいくといいね」

美味しい言葉が出てこなくて、違う言葉しか出てこなかった。本当は、受験が終わってからでいいから、また会いたいって、また会おうって言いたいのに。

「お互い、頑張ろう。お互いに、第一志望に合格するといいね」

街頭近くのベンチに吉永君が座った。私は街灯の下で、そんな吉永君を見たり見なかったり。

「私、自信ないな」

「大丈夫。自信を持てば、きっと合格するよ」

前向きな吉永君の言葉。妙に人わりと体の芯が温まった。吉永君の言葉は、体が吸収するみたいだ。寒い公園にいるからでは、きっとない。

ゆつくりと公園の中にある一番大きな桜の木に近づいてみた。街灯のすぐ近くにある。大きくて立派な木だ。桜の木の下に立ち、見上げてみると灰色の空に広がる黒い枝が見えた。春になると、満開のピンク色の花を咲かせるようには見えない。

「私、この木が咲いているところって、見たことないな」

「満開になると、ものすごくきれいなんだ。前に一度だけ見たことがあるよ。小さいときに、家族でこの近くに来たときに見たんだ。花見客でいっぱいだったから、ちよつとしか見てないけど、すごくきれいだった」

今、吉永君の脳裏には当時の素晴らしい桜の木が写し出されているのだろつ。ベンチから桜の木を見上げて、目を細めている。

「私も見てみたいな」

吉永君から、誘いの言葉を期待した。だけど、吉永君は何も言うてはくれない。鈍感なのか、私に興味を持ってくれないのか。

自分から切り出さないと、無理だろつ。

「ねえ、大学に合格したら、この木の下でまた会おうよ。3月の終わりごろには、もう咲いているかな」

「いいよ。気温にもよると思うけど、合格発表が終わった後に、ここで待ち合わせよう。いつがいいかな」

やった！

OKしてもらえた。これで、また吉永君に会える。嬉しくて爆発しそうな感情を押し殺した。交際をOKしてもらったというわけでもないのに、喜びすぎたらおかしいと思われそうで。

「3月31日の正午！　なんてどう？　覚えやすいでしょう？」

「わかった。3月31日の正午に、ここで会おう」

そして、受験を終え、私はどの大学にも合格しなかった。浪人することになったのだ。ショックだった。どこでもいいから大学に合格したら、吉永君に会うんだと、それを目標にしていたのに。

大学に合格したら――

私は、そう言ったのだ。今でもはっきりと覚えている。

どこか一校は受かるだろうと思っていたのだ。でも、結果は惨敗だった。

吉永君との約束を守ることを優先して、私は吉永君に会いに行かなかった。

どこも受からなかったと言ったら、それなのに会いに来たと知ったら、吉永君はどう思うだろう。

うそつきだと思われるかもしれない。吉永君に変な目で見られたらと思うと、行けなかった。

瞳先輩と双葉先輩

吉永君の結婚式や挙式のプロデュースに奔走する毎日。
あこがれの人の結婚式かぁ・・・。

自然とため息がこぼれおちる。お客様の前では、絶対にしないけれど。

ひとりになるたびに、ため息をしているような気がする。

ショックだったなあ。幸せそうな彼女の笑顔と、ひきつった笑顔の吉永君を今でも鮮明に覚えている。
あんなにショックなことは、今までなかった。

きっと、これからだってここまでショックな出来事には遭遇しないだろう。

「お先に失礼します」

疲れた声。自分でも嫌になる。

会社を出ると、なんと、瞳先輩と双葉先輩が会社の前にいた。

「お！きたきた。待ってたんだぞ」

「先輩！どうしたんですか。突然、こんなところで」

「実はね。この近くまで来たものだから、二人で行って見ないかっていうことになってね。突然来て、なっちゃんをびっくりさせようと思って、何も言わないでおいたの」

私を驚かせようとは。昔から変わっていないようだ。

瞳先輩は、人懐っこくて、その上、人を驚かせるのが好きな人だ。かわいげがあるからいいけれど、それがなかったら、こんなに仲良くはなっていなかっただろうな。

「人を驚かせるなんて。相変わらず、悪い人ですねえ」

「悪い人だなんて、人聞きの悪いこと言っちゃって。それよりも、一杯どう？」

「いいですよ。そのために来たんでしょうから」

飲むなんて、今の私には必要なことかもしれない。

お酒におぼれるのはいいことではないけれど、ちよつとくらいはね。お酒でも飲んでないと、やっていられない気分だから。

三人で駅前のチェーン店の居酒屋へ行つた。

「3人で飲むのって久しぶりだね」

席に着くなり、瞳先輩が身を乗り出してきた。隣に座る双葉先輩は、軽く苦笑いを浮かべているようだ。

「相変わらず、元気ですね」

「もちろん、元気だけが取り柄みたいなものじゃない。ね！」

突然、気を抜いていた双葉先輩にふると、双葉先輩は驚いて体をぴくりと跳ね上がらせていた。それを見た瞳先輩は、少々ムツとした

様子。恋人が話しかけただけで、驚くとは何事かとその目が言っていた。

注文を終え、話は自然と私の仕事へ移って行つた。本当は、あんまり話したくはないのだ。吉永君を思い出してしまつから。

「ウェディングプランナーやってるんでしょう？ 素敵よねえ」

「先輩たちは、いつなんですかあ？」

出されたばかりの梅酒サワーを飲みつつ、話の中心を自分から先輩二人に移動させた。

二人ともドキツとしている。瞳先輩は照れているようだけれども、双葉先輩はちよつと違う。あんまり乗り気ではないのか、瞳先輩とも私とも目を合わせようとせず、そつぽを向いてビールをグイツと飲んでいる。

「私たちねえ。いつごろかしらね」

瞳先輩は、すぐるような目つきで双葉先輩を見ていた。しかし、双葉先輩はそれでもそつぽを向いたままだ。

おかしい。いったい、双葉先輩はどうしちゃったのだろう。

「結婚が決まつたら言つてくださいね。私が、先輩たちの結婚式をプロデュースしますから」

「本当？ 嬉しい！ かわいになつちゃんに結婚式をプロデュースしてもらえるなんて」

「高いですけどねえ」

「えー！」

女二人で盛り上がっているのに、双葉先輩は隅っこで、から揚げやらシーザーサラダやらをつまみにビールを飲んでばかりいる。なんだか楽しくなさそうだ。二人の結婚の話をしているのに、全然話に入ってこようとはしない。こんな双葉先輩は初めてだ。

あんまり、結婚の話はしたくないのだろうか。まだ、結婚は考えられないのかもしれない。二人で会ったときだって、私に彼氏を作れと言っただけで、自分の話はあまりしていない。

秘密の始まり

吉永君の結婚式のプロデュースは、苦痛だった。まだ、彼のことを心の片隅で想っているということなのだろう。

とつくに忘れていたと思っていたのに。本人を目の当りにしたら、自分の気持ちがふらついてしまったようだ。まさか、再会するとは・
・・・・。

再会の仕方が、あまりにも衝撃的すぎた。
もうすぐ結婚するというのだから。

私が、男性と付き合っても長続きしない理由は、わかっていないつもりでも本当はわかっていたんだ。ただ、理由を口にしてしまうのが怖かった。二度と会えない人のことを好きでいたって仕方がないと頭では分かっていたからだと思う。

吉永君の結婚式のプロデュース自体は、いたって順調に進んでいた。先輩たちのアドバイスを聞きながらも、二人の要望通りの結婚式に近づいて行っている。

私は、本当にこのままでいいのだろうか。
結婚式のプロデュースをしていると、突然、胸が苦しくなることがあるのだ。

特に、この間、二人きりで会った時のことを思い出すと、吉永君のほっこり、もしかしたら私のことを・・・・・なんて考えてしまう。

きりのいいところで仕事を切り上げて、会社の外に出ると、そこには吉永君がいた。

吉永君は、会社帰りらしく、紺のスーツにビジネスカバンを肩から掛けていた。ポケットに突っこんでいた手を出すと、私のほうを艶めかしく見た。

「どうしたのよ」

「ちよっと、近くまで来たから」

その言葉は本当なのだろうか、内心疑っていた。本当は、わざわざ会いに来てくれたんじゃないかと思いたかったのだ。

「そうなんだ。そうだ、結婚式のことなら心配しないで。すべて順調に進んでいるから」

無理やり営業スマイルを作って見せたのだが、吉永君は相変わらず真剣な目をしている。吸い込まれそうなほどの真剣なまなざしにどうにかなくなってしまいそうな気がした。

「吉永……君？」

「ちよっと、いいかな」

吉永君が歩きだした。私は、吉永君の横にぴたりとついた。

吉永君の横顔は、ネオンに照らされてよく見えた。口をへの字にし、まっすぐ正面を向いている。すでに、どこに行くのかが決まっているのだろう。額には、うつすらと汗のようなものが光っているようにもみえる。今日は、さほど暑くもないというのに。

歩き始めてから、吉永君は何一つしゃべらない。私が話しかけても

堅く口を閉ざしたままだ。

気がつくと、人気のない公園に来ていた。
あたりをきよろきよろしてみたが、誰もいない。

吉永君は、落ち着いた表情でこちらを見ている。

と、次の瞬間、吉永君がわたしを抱きしめた。おもいきり、力強く。

「よ、吉永……君？」

どうしていいかわからない。

頭では、すぐに押し返して拒否反応を示すべきだと思うのに、心はこのままでいたいと言っている。ずっと心の片隅に居続けた人が、今、こうして私を抱きしめているのだ。

吉永君の腕の中はとても温かい。このまま、吉永君の腕の中にいたい。そう思っていたら、自然と吉永君の背中に腕をまわしていた。

いけないと思っているのに。

「だめだ」という言葉が頭の中でこだまする。それでも、私は吉永君から離れなかった。

風ひとつない穏やかな夜の公園で、至福の時を過ごしている。

無言のまま、吉永君と唇を重ねた。

すべてが、吉永君主導だった。私は、ただすべてを受け入れるだけだった。

その夜、私は家に帰らなかった。

後悔ばかり

私は、一体、何をしてしまったのだろう。何もかも忘れてしまいたい気分だ。

ずっと、心の中に居続けた人、吉永君。

お互いにフリーだったら、何も悩む必要はなかったのに。

後悔、後悔、後悔。

もう昨日の夜のことは、思い出したくはない。

魔がさした。

と言えば、すべてが片付くと言うわけではない。

もうすぐ結婚する人だと言うのに。結婚式をプロデュースするお客様であるというのに。

第一、吉永君の未来の奥様に対して、私はどう接したらいいのだろう。

顔を合わせなくて済むということはないのに。

そんなことは、わかっているはずなのに。

幸いだったのは、今日が休みだったということ。

こんな心理状況で、何ができると言うのだろうか。

自分が怖い。自分が憎い。

今頃、吉永君はどんな気持ちでいるのだろうか。

平常心でいるのだろうか。それとも、私と同じように後悔の念に押しつぶされたりしているのだろうか。

もう、二人きりで吉永君と会ってはいけない。

それは、今朝、別れるときにも吉永君に言ったことだった。

「もう、こんなことはよそう」

「・・・」

吉永君は、黙って私の話を聞いていた。

寝癖だらけの頭をそのままにして、グレーのジャージ姿でソファに縮こまって座っていた。

昨日の夜と同じ服を着て、携帯用の折りたためるブラシで髪を整えながら、鏡越しに吉永君を見ていた。

「もうすぐ、吉永君は結婚するんだから」

「・・・」

眠いのか、反省しているのか、吉永君はうつむいたまま、私の話を聞いていた。

何か言ってほしかった。

何も言わないで、私の話を聞くだけなんて、ちよつとずるいと心の中で叫んでいた。

吉永君の心が全く読めず、どうしてもいいのかわからず、一方的に自分の主張だけを吉永君にぶつけることしかできずにいた。

「次に会うときは、フィアンセも一緒だね」

きつと吉永君がドキッとすると思って言ったせりふだったが、吉永君は微動だにせず、ソファに座ったままだった。

何も言ってくれない。

どうしてだろう。

私の願いは、通じていないらしかった。

吉永君の声を聞くことなく、私は身支度を済ませると、

「もう帰るね。また、うちの会社で」

とだけ言つて、別れたのだった。

昨日の夜のことは、忘れたに思っているのに、昨日の夜のことは
かりが脳裏に浮かんでしまう。

探し求めていた人と一緒にいられたから？

必死で、吉永君を諦めようとしているのに、吉永君のほうから私に
近づいてきたことで、私はおかしくなっている。

自分でもわかつている。

今の自分は、絶対におかしい。冷静ではいられないのだから。

ベッドの上から起き上がれずに、吉永君と別れた時と同じ格好をし
ている。

早く、脱いでしまえばいいのに。

服を着替えて、一緒に心も着替えて。

でも、それすらできなくなっている。

力が出ない。私の頭が、私の体に出させようとしていないよう
だ。

どんな顔で

吉永君のフィアンセとどんな顔で会えばいいのだろう。

仕事上、会わないわけにはいかない。

自分でも自分がわからなくなっている。人間の欲望というものなのだろうか。心の奥底に眠っている熱い思いというのは、表面を冷たい氷で覆っていてもすぐに溶けてしまうものなのだろうか。

今まで、幾度も後悔をしたことがあったが、ここまで強く後悔したのは初めてだ。

人として、私はどうかしている。

もう吉永君とも会いたくない気分だ。この気分が、ずっと続いたほうがいいのだろう。

会いたくない気持ちだが、会いたい気持ちを上回っているほうが、仕事上の付き合いだけで済ませることができそうな気がする。

もしも、会いたい気持ちのほうがはるかに上回ってしまったら、仕事の手につかなくなりそうだ。

それでは、プロとは言えないじゃないか。

私は、吉永君の結婚式をプロデュースするのだ。

もう一度、自分に強く言い聞かせた。

吉永君とフィアンセが二人並んでいる姿をどうやって受け止めるべきなのかを考えながら、私は、吉永君たちと打ち合わせをしたときの資料に目を落としている。

二人の門出を祝うために、フィアンセの希望通りのお花に囲まれた素敵な結婚式をプロデュースしてあげなくてはって言う思いと同時に、吉永君が本当に他の女性と結婚してしまうんだと言う現実を受け止めなくてはいけない気持ちが揺れ動いて、本当は、涙があふれ

出してしまいそうだった。

職場で、突然、涙を見せることなんてしたら、先輩たちや上司に心配されてしまうだろう。

私は、感情を入れないで、この結婚式をプロデュースしたいって思っているのだ。

そう思っているのに、どうしても感情が私の邪魔をしてしまう。

大丈夫、私は、吉永君への思いを断ち切って、素晴らしい結婚式を二人にプレゼントするのだと強く自分に言い聞かせ続ける。

そうしなければ、とてもじゃないけれど、この結婚式をプロデュースすることなんてできなくなってしまうくらいに、吉永君への思いは強くなっているのであった。

反撃開始

普通の顔をして、いつも通り仕事をしている。自分の席に座り、吉永君の結婚式をどうするかを考え、段取りを練っているのだ。

すると、遠くから何やら女性の声が聞こえる。しかも、それは普通の声ではなく、腹の底から出しているとても大きく大きな声だった。一体、何事かと思い、そちらの方を見ると、吉永君のフィアンセが事務所の入り口からこちらへとゆっくりと歩きながら大きな声を出しているのであった。

「この会社の人間は、私のフィアンセを寝とつたんですよ！」

ね、寝とつた！？

きつと、それは、私のことを言っているのだろう。まさか、私と吉永君が一緒にいるところをどこかで見ていたというのだろうか。

吉永君の結婚式の段取りを考えるのを中断して、机に足をぶつけそうになりながらも、吉永君のフィアンセのもとへと駆け寄った。

「お客様！」

私よりも先に、上司の坂本部長が駆け寄っていた。

「一体、どうされたのですか。落ちいてください」

坂本部長は、落ち着いた声で言った。

「落ち着け？ 落ち着いてなどいられるわけがありません。この会社

の人間が、私のフィアンセを奪い取ったんですよ！絶対に許しません」

近寄ろうとする私を吉永君のフィアンセが睨んできた。私は思わず後ずさりしそうになってしまった。一瞬、足が硬直したけれど、口としてこのままではいけないとなんとかしなくてはならないと自分に言い聞かせて、近付こうとすると、突然、吉永君のフィアンセが私を指さした。

「あなたが私のフィアンセを奪ったのよ！」

そういうと、ゆっくりと私の方へと吉永君のフィアンセが近付いた。

「日比野さんだったわね。私が、何も知らないとも思ったら大間違いよ！フィアンセのことを探偵に調査させていたのよ。何かあったら困ると思ってね。まさか、私たちの結婚式をプロデュースしてくださる方と浮気をしていたとはね」

「う、浮気だなんて・・・」

口ごもっていると、吉永君のフィアンセが、カバンの中から封筒を取り出し、封筒の中から写真を思い切りばらまいた。そこには、私と吉永君が写っていた。会社帰りにばったり会ったところ、一緒に居酒屋へ行ったこと、そして、同じマンションに入ったところ・・・。

「これでもまだ、浮気をしていないとでもいうつもり？」

もう、これ以上は無理だった。私は、必死に床にばらまかれた写真を拾うことだけで精いっぱいだった。上司や先輩、同僚が茫然とし

ている間に、私は、すべての写真を拾い上げた。しかし、時すでに遅し、茫然としながらもその場にいた上司も、先輩も、同僚も、写真の中の私たちを見てしまったのだ。

「も、申し訳ございませんでした。すぐに、他の人間に担当を変わらせますので・・・」

と、坂本部長が吉永君のフィアンの真横で頭を深々と下げて言ったのだが、それを制するように手を出すと、吉永君のフィアンセは、私の目の前に立った。

私は、写真を抱えていた。

「いいえ、担当は、日比野さんあなたのままでいいわ。いいえ、ぜひ、あなたに私と吉永の結婚式をプロデュースしていただきたいわ。もちろん、結婚式にも出席していただかなくてわね」

不敵な笑みを私に見せると、そのまま吉永君のフィアンセは帰ってしまった。

すると、鬼の形相で私の前に坂本部長が来た。

「一体、君は何を考えているんだ！大切なお客様のフィアンセに手を出すとは！」

「も、もうしわけありません！」

深々と頭を下げることしかできなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0727d/>

「愛してる」が迷ったら

2011年12月2日15時55分発行